

特集2

震災から10年 ～郡山市ふれあい科学館での活動～

安藤享平（郡山市ふれあい科学館）

1. はじめに

もう10年、いや、まだ10年・・・何とも言えない思いが去来する中で2021年3月11日を迎えました。その直前の2月13日夜には東北地方太平洋沖地震（以下、東日本大震災）の余震である福島県沖地震が発生し、自然の大きさを心身で感じています。

私の勤務する郡山市ふれあい科学館は福島県のほぼ中央部に位置し、東日本大震災の時は震度6弱の揺れに襲われました。そして震災後の復興と東京電力福島第一原子力発電所による原子力災害への対応の中で活動を行ってきました。震災から5年のタイミングで、当時の状況とそれまでの活動について振り返りましたが[1]、今回、改めて別の視点を含めて振り返ることにいたします。



図1 県内最大級の624戸の仮設住宅があった場所も、現在は1棟（無人）を残して解体されました（郡山市内 若宮前応急仮設住宅）

2. 地震発生から科学館の再開まで

震災後の初期において、活動に大きくわけて3つの転換期があったと考えています。

- ① 混乱期（地震発生～3月中旬）
- ② 現状対応期（3月下旬～4月上旬）
- ③ 日常再開検討期（4月中旬～）

なお、この各段階の時期は地域の被災状況によって全く異なることに留意ください。

当時の細かな状況は[1]に書きましたが、大きく状況が変わってきたのは、ある程度水や食料が店頭に並び、ガソリンが給油でき、少し先のことを考えられるようになった4月中旬でした。

それまでは日々を生きること必死であったのが、心のケアや日々の生活をどう取り戻すかということを考えるようになったとき、市の施設で再開できる場所は再開させることに大きく舵が切られました。避難所はもちろん家庭でも自由に動けず、子どもたちのストレスも相当なものでした。まだ大混雑の避難所がまだある一方で、被害の少なかった場所で生活する人々のことも考えると、並行して日常を作り出すことも重要な課題となったのです。

市内で被害が少なかった施設として、当館、遊園地、牧場の3カ所が2011年4月29日のゴールデンウィークから再開しました。多くの方々がお越しになる様子を目の当たりにして、自粛ムードが続く中でも活動を再開できてよかったと心から思うとともに、次の段階へと進めていく方法を、状況を踏まえて慎重に考えながら、実行に移す段階に入りました。

3. 時期の見極め

科学館の活動を再開したとはいえ、地域の

さまざまな状況は当然通常とは程遠いものでした。そうしたことを考慮し、特に科学館外の地域に出での活動は、歓迎される状況を見極めて行っていく必要がありました。

3.1 原子力災害への対応

特に私たちの地域では原子力災害の影響は大きく、今から振り返ると震災から 3 年～5 年かけて少しずつ日常が戻ってきたと考えています。(ただし、元には戻っていません)

そして、科学的な知識や根拠に基づく情報では割り切れない、「科学不信」とも言える状況が生じている中で、人の感情に対してどのように向き合うかも不可欠な要素でした。

(1) 天体観望会

屋外活動である天体観望会は、再開の判断に時間を必要としたものの一つでした。震災直後は放射線量の上昇により、学校では屋外活動の時間が 1 日 3 時間以内に制限されていた中で、安全・安心を確保するにはどうすればよいか焦点となりました。



図 2 2011 年 6 月に再開した天体観望会の様子

市内各地の除染が進む中で、放射線量が低減したことを確認の上、館の目の前にある駅前広場での自由参加形式の観望会は 2011 年 6 月に再開しました。放射線測定器（ガイガーカウンター）を片手に、質問されたら測定器

で数値を示すことも行いました。自由参加形式ですので、当館としては安全と判断して機会を提供し、参加するかは屋外での活動をどう判断するかは個人に委ねることにしたのです。

一方で市内各地の公民館と共催での形式の観望会は 2 年間ほぼ行えず、3 年目から通常の実施回数に戻りました。これは被災した公民館があることでもあります。地域への参加呼びかけなど、完全な自由参加とは異なる事情も考慮して、地域の住民の方や公民館の方の意見による判断です。講師として派遣依頼を受けて出張する形式の観望会も、震災後 2 年間はほとんどなく、3 年目から依頼が戻ってきました。

この当初からの対応は、屋外活動への懸念が大きい方と活動機会を求める方の双方に配慮した「最大公約数」の判断であったと思います。3 年ほどでほぼ元の活動に戻ってきたのは、未知であった放射線への懸念が年数を経るごとに理解されてきたこと、放射線量も低減してきたことが、状況の変化を生んだと考えています。

(2) 学校団体の受け入れ

館内に目を向けると、子どもたちの遠足などで屋外が控えられたために、当館には県内各地の幼稚園・保育所はじめ多くの団体が押し寄せました。通常の団体用のプラネタリウム投映機では収容しきれない状況から、急きょ追加投映機を用意してなるべく受け入れを行うこととなりました。これは震災後 5 年目に落ち着きました。

3.2 自粛ムードからの脱却

市内では福島第一原子力発電所近隣の市町村から、多くの方が避難所、そして仮設住宅での避難生活を行うこととなりました。また家屋の全半壊も多く、大変な状況に置かれた方々が多い中で、賑やかなイベント性の高い事業をいつから行えるかも、施設再開前は

いぶんと考慮しました。しかし、施設を再開してみると、各方面からの期待も高まってくるのが実感できました。結果的には2011年の夏休み、そして10月の開館10周年記念イベントなど、できる限り明るい話題を作り出すべく、予定以上の内容を企画することとなり、総力戦で取り組むこととなりました。

振り返ると、大変な状況にある方もプラネタリウムやイベントに参加して、ひとときの「非日常」を楽しんで、息抜きをされたようです。こうした点でも「日常」を作る大切さを思い知らされました。

3.3 外部に向く活動

科学館という施設内で行う活動は、いわば「待ちの姿勢」で、それぞれの方の意思で来館すればよいことになります。一方で、外部に向く「攻めの姿勢」での活動は、その場所の状況をしっかり見極める必要があると考えています。3.1で触れた、地域に向く観望会を2年間行わなかったのは、そうした状況判断からでした。

市内にある避難所や仮設住宅などで、天体観望会などを通して、避難されている方に天文を通して提供できるもの・ことはないかと考えていました。ただ職場の状況が手一杯で、外部にアプローチまでの余裕がなかったことも大きな要因でしたが、大変な状況下で迷惑にならないかなどいろいろ考える間になかなか実行に移すことができませんでした。

そうした中で、私の自宅近所にある仮設住宅のコミュニティをサポートしている社会福祉協議会の方から連絡を受け、仮設住宅に住む遠方からの避難者の方と地域を結び付ける活動や、家の中から外に出るための活動への協力の依頼がありました。最初は職場で受けた依頼でしたが、仮設住宅での観望会や臨時災害FM局での星のお話など、結果的には公私で数年間に渡って不定期に活動を行うことができました。

もっと積極的にアプローチしても良かった

かと振り返るときもありますが、ミスマッチが生じても双方に不幸であるとも思います。科学館として窓口の役割となった一例でしたが、支援を求める側と出かけられる側の双方を結びつける仕組みが構築できると良いかと考えます。

また災害発生から時間が長く経過していくと、近い場所（東北地方内）での相互支援の取り組みも息の長い活動として重要だと思います。

4. 各地からの支援

震災直後からメールなどで多くの励ましの声を頂戴したり、直接・間接の支援をいただいたり、人の繋がりがこれほどありがたいと感じたことはなかったです。各地からいただいたさまざまな力が、大きな助けとなりました。

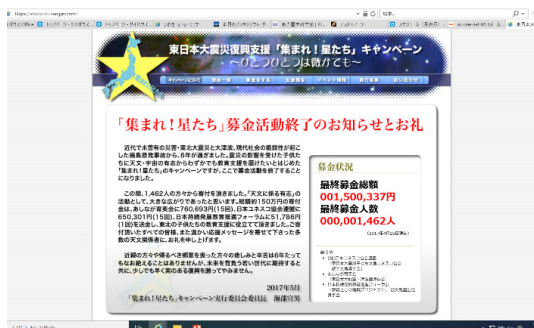


図3 震災後6年間、募金等の活動を展開された「集まれ!星たち」のウェブサイト

4.1 言葉の力

多くの科学館や博物館から応援メッセージが寄せられ、当館内でも掲示させていただきました。メッセージを寄せていただくにあたっては、それぞれの場所で震災や福島県を紹介していただくなど、理解を深めていただく活動も展開していただいていた。こうした人の繋がりを確認できる取り組みは、人々に大きな力をもたらす原動力になりました。

4.2 人の力

震災後何年にも渡って、各地から多くの方にお越しいただき、さまざまな活動に参加いただけたことも大きな助けとなりました。

特に 2012 年の金環日食の際は、福島県が限界線上に位置することから、現場で手一杯の私たちを見かね、事前の講座やワークショップ、当日の観望会など、全国から手弁当に近い形で講師として参加していただきました。

2013 年にはオーストラリアからの支援として、国立天文台水沢の亀谷收さんなどのご尽力で高校生を対象に、「PULSE@Parkes」を実施しました。[2]非常に刺激的な活動で、こうした研究体験は震災を経て将来を一層真剣に考える高校生にとって、大きなインパクトをもたらすことができたと思います。[3]

適切なタイミングで人の力を頂けることは本当にありがたいことでした。

4.3 心のこもったモノ（と場）

2012 年の金環日食の際には、「日食で福島の子どもたちに元気を！」実行委員会が立ち上がりました。多くの方のご寄付と企業の支援で、特に大きな被害を受けた沿岸部を中心に、福島県内の多くの学校や仮設住宅に日食観察シート 6 万枚を届けていただきました。

また、募金がきっかけで立ち上がったイベントもありました。オーロラメッセンジャーとして講演をされている中垣哲也さんが北陸地方で講演された際に、参加者の方から「福島のみなさんにもオーロラを届けてほしい」と募金が集まり、それがきっかけとなり 2014 年に当館で中垣さんの講演会を開催することができました。

こちらからの情報発信の機会を多く提供いただけたことも、とても大事な場でした。福島県への理解を、天文を通して進められるよう「ふくしま星・月の風景写真展」の開催や、コミュニティラジオで定期的に紹介の場をいただきました。

5. おわりに

震災から 10 年が経過した現在、今度は新型コロナウイルス感染症の猛威にさらされています。荒っぽい例えですが、コロナ禍は震災で言えばまだ揺れている最中で、混乱期の真っただ中なのでしょう。復興期はまだ先ですが、今回は日本中・世界中が被災している状況なので自力での復興を頑張っていくことになるのかな、人の力を発揮するには「密」はまだ無理にしても、オンライン等を生かして連帯を深めていくことは有効かな、など考えがいろいろよぎります。

マズローの欲求 5 段階説をもとに考えてみると、震災の時は生命維持や安全という、生きる上での土台が崩れていました。まずここを何とかしないと、先に進むのが難しい状況でした。一方、今回はこうした土台が不安定な状況で、安全の欲求を満たすことと並行して、承認・自己実現の欲求などを満たせるような活動が求められているのが現状と考えています。天文教育・普及活動が、そのような人々の欲求にどのようにアプローチできるかまだ手探りです。

改めて 10 年を振り返り、多くのみなさまに深く感謝申し上げます。

文 献

- [1] 安藤享平 (2016) 「東日本大震災から現在までの郡山市ふれあい科学館での活動」, 第 30 回天文教育研究会集録, 146-.
- [2] 亀谷 收ほか (2013) 「アジアで初めての海外からのアウトリーチ活動 PULSE@Parkes 実施状況について」, 第 27 回天文教育研究会集録, 100-.
- [3] 小川 義和編著 (2019) 「協働する博物館 博学連携の充実に向けて」, ジダイ社, 132-.

安藤享平